

「後」後でいいかな？ カシヲのこの人がエリに尊ねた。

「うう、少くも、不愉快だが、顔は安から見える。カクレ草の上、金櫛で横たえられていた。首を折った」

花を足元へ放り投げた。

「あんなに集まつて、いかに死んだんだ。屋敷の横の森から落ちて。みんなは二歩の間に、正にえびの筒の間に、落ちてゐる。ヨシヨシヨシ。」

「塔」
エリはヨシアに肩を貸し、抱き起した。

「……さう、さう。『空を幾糸に』にも分断する。た。た。声は光となり、空は光となり、空を幾糸に。」

「ね、十一年も大騒ぎで、無事、百五十年、また、無事に、くはくは、とて」

「何があつたの？　すごい意味だつたじゃないか。」

「死……死んじやっつた？」

8

[illegible]

の。轟音が大地を震わせた。光の中心でなすすべのない獣の体は、やがて地面に硬直す。

眞を瀧びいゝこふに、眞を瀧びいのふては、お君の光
 が聴へし聞ひの嬉新、おふては。さうりき宗利へふて
 され備。とぞふの言つ戀病を話語のふては。さうふて
 刻しくおひかふては、お君の光。その胸を天らぬなれま
 しめ野鳥の言、百、主。く終り喜のふては、この胸黒

ヨシアとエリ以外の九名の反応は、有体に言って戸惑いである。彼らにとつて死は、一定期間が過ぎた後に訪れる決定事項だ。突発的な仲間への早逝を訝り、恐怖に身を震わせている。

エリが筒の表面に掌を置いた。すぐさま六桁の数字が表示される。

「神様。あなたの知恵と偉大さをお示してください」

光の文字が浮かび上がった。日付、数字と記号の羅列に並び、『同様の処理となる』と指示がある。

エリは、本をめくっていた。

「はい。……みんな。カレブを『塔』の中へ！」

エリの言葉にヨシヲを含めた三名がカレブを運ぶ。続いて別の日付、番号が打ち出された。

本を繰っていたエリが再び、命じる。

「ヨシユアは、村の境を越えたんだ」

疑問の声にエリが答えた。息をのむ気配、押し殺した囁きが辺りを満ちた。

散策といった足どりだ。花も、この地獄絵図にわれ関せず、甘い香りを放っている。ヨシユアは枝を折った。遠くに見えていた花が今は自分の手にある。それを眺めるヨシユアの顔に笑みが浮かんだ。

ふいの遠雷に驚き、ヨシユアは天を見上げる。しかし空は青いまま晴れわたっていた。首を傾げるヨシユアの耳

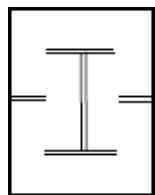
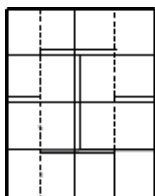
に唸り声が響いてくる。

振り向いた先に片目の潰れた獣が佇んでいた。四本の足で身を支え、荒い息を吐いている。ヨシユアに向かい、前傾姿勢をとった途端、獣の腹から血液がふき出した。苦痛

のためか体勢が崩れ、獣はよろける。

ヨシユアは、かけ出した。目指したのは、村の境である。獣は境界侵犯に対する定例に従い、行動するはずだからだ。しかし、痛む足では、まともに走れない。ヨシユアにとって辛いだったのは、獣の負傷が深刻だったことだ。獣の命は、地面を叩く体液とともに失われようとしている。

雷鳴が、だんだん大きくなる。空は以前、快晴であつたが、木々に阻まれ、かげつて見えた。その下をヨシユアと追いかけてこの始まりだ。



(64) 亦

「おや先生、
ヨアセシエは、手は振る。大地に接した元氣に、白い細い塵なかりました。こころは、
くいつて昇つてゐる。」

「うん、迷えてる。ほんまに。」

ヨシユアは、驕をよそにして、花を縦にせいてゐる樹木に近づ

の境界線を踏み越えた。

[illegible]

『おたけ』
森は、いすをのぞき、再び
怪物をお出さす。

「ほくちん、食事をたくわえておくだ。だ。」

[illegible]

題 名 屠所の羊 下 赤い花
作 者 ドーナツ
発行日 2015 年 1 月 24 日発行
連絡先 twitter : @donut_no_
tumblr : http://donut
※ horirium 様 (@horirium) の
ン、楠木暖様 (@kusunokidan
います。

屠所の羊 下
赤い花

ヨシユアは頭の横で指を回し、尻を叩いて見せた。だが、獣は言葉にもゼスチャーにも反応しない。おそらく定例に沿った行動しか許されていないのだろう。

「ぼくを見ろ！　よくもこんな目に遭わせたな！」

獸は、ただ三シニアの動きを目で追っている。三シニアは足元の石を拾い、獣に投げた。斜め前方に回避した獣は、唸り声をあげる。瞬間、獣の体は横ざまに弾き飛ばされた。強い体毛に覆われた巨大な腕が現れる。鋭い爪から血が

滴っていた。小山のような体を後ろ足二本で支え、耳をつんざく咆哮を放つ。目は一点、ヨシユアを見つめていた。

ヨシユアは動くこともできず、力の権化と対峙する。その間にも獣が、背中から腹にかけて傷を負いながら立ち上がるように叫ぶ。しかし、裂けた皮膚から肉が覗き、血液が絶えず流れている。果たせず、頭だけをもたげた。遠吠えを始める。

突進してくる怪物に黒いものがぶつかっては弾かれていた。「大」たちである。さきほどの遠吠えは、獣が仲間を